

ラーニングコモンズの在り方（案）への意見等一覧

平成 27 年 1 月 28 日

1 参考になる点

・「0 はじめに」に記述のある「もとより、LC の設置形態や LC を活用して行われるサービスは各大学がそれぞれの多様な環境や教育に応じて想像力を発揮して自由に決定し、利用者のニーズに対応しつつ、可能な限り柔軟に運用を行うものである。」の理念が重要であると思います。ラーニングコモンズの普遍的な側面を十分に理解したうえで、その枠にとらわれない運用方法をその都度模索していく必要があると考えます。「ラーニングコモンズの在り方（案）」は、ラーニングコモンズの普遍的な側面の理解につながるとともに、運用中のラーニングコモンズについて見直しを行う際の資料としてたいへん参考になります。

・これまで、LC の整備や方向性については、先行館の取り組みや整備状況をみながら進めてきたが、今回の「ラーニングコモンズの在り方（案）」によって、LC の整備の全体像を把握することができた。「ラーニングコモンズの在り方（案）」は、「こうならなければならない。」という教科書ではなく、「こんなことができる。」といったアイデアが掲載されている。それぞれの大学の方針に沿った魅力ある LC の運用を考えてゆきたい。

・（意見というわけではありませんが）こうした共通理解を持つことは大変良いと思います。大学単位では理解されているとはとても言い難い状況のため、図書館だけでなく、大学全体での理解に働きかけていかなければならないと感じています。

・「ラーニングコモンズの在り方（案）」に著されている LC の定義や目的、必要な要素等については、これまで私自身が想定していた内容と相違があるということはなく、尤もであると納得できる内容であると感じました。特に冒頭部分の、「実現にあたっては、経営層や教育担当部署などとの学内合意形成が欠かせない。」ということや、LC は各大学の個性である教育方針が表出したものであるということは大前提であると考えられますが、昨今では LC を作ること自体が、大学の目的になってしまっている風潮もあるように見受けられます。もちろん、このような課題や考え方を、大学図書館から大学本体に向けて発信していくことが大切だと思いますが、「図書館が LC を作ればよい」というだけで終わってしまうのではなく、大学全体を巻き込んだものにしていくことが、本学も含めて課題であると思いました。

・利用者の自主的な学びを促し、かつ大学側が利用者への情報発信を行える場として、両者が双方向に成長できる仕組みだと思います。拡張・進化という点からも様々な可能性の広がりを感じます。設置以前に、他部署だけでなく学生とも意見収集・交換の場が設けられれば良いと思

ます。当館は、ラーニングコモンズ未設置館ですので、ぜひいろいろと参考にさせていただきたく思っております。

・基本的な理念の定義に加えて、具体的に（１）LCの基本構成、（２）LCの深化の方向性、（３）LC整備セルフチェックが呈示されていることにより、各大学がLCの設置・運営を行うにあたり、大変に参考になるものと思われる。

・具体的な意見はありませんが、今後の本学図書館のラーニングコモンズの運営について参考にさせていただこうと考えております。

2 提案

・「8. LCの拡張と進化」の最後に述べられている「エビデンスの収集と分析」について、少しでも具体的な記述があるといいと思います。評価の指標は第二分科会のテーマに関わりがあるかと思えます。今回のシンポジウムの内容をまとめて盛り込まれることを希望します。

・チェックリストが付いているのは、具体的に考えることができ、非常に良いと思います。今回のシンポジウムで出てきた実例等を追加して、より充実したものが出来上がるのを期待します。

・当該案においてはラーニングコモンズについて図書館が取り組むべき内容全般がまとめられていると理解した。一方、施設、人、提供し得るサービスなど要素が多岐に渡る分、必ずしも図書館でなくてもよいと思われかねないとの危惧も覚えた。当該案を共通認識にして、図書館だからこそ提供できるもののことを具体的にイメージしたうえで取り組み、学内でも主張することが必要だと感じた。その一案として、11.に挙げられた「学士力の養成」に関連した図書館職員による教育理論の理解と実践を挙げたい。従来の受動的な授業形態から参加型授業へと移行している現在、教育スキルの理論化・体系化も進んでいる。ラーニングコモンズの整備により、これまで以上に図書館職員が学生への教育を行う機会が増えるだろう。その際、専門性に裏打ちされた指導ができれば学生にとって有益であるし、図書館職員も教育スキルというよりどころを持つことで自信を持って組むことが出来ると思われる。また、例えば学修的なイベントのコーディネートを行う際、教育理論を理解したうえで教員の補佐を務めることも考えられる。教育理論を共有し得る者と認識されれば教員からの信頼も得られるのではないだろうか。

・大学図書館から見ただけの定義、提案では足りないのではないのでしょうか。そもそも提案作成の段階からFD部署、教務部門などの関連部署とLCについて共に考えていく必要があると思えます。個々の内容については、とてもよくまとめられおり問題はないと思えます。

・本文と参考文献の関係がわかりにくい。(iおよびiiについて)iは学修支援環境の整備に関する要請 iiは大学教育の質的転換に関する要請かと思いますが、参考文献の一覧に、このくだりを

読めと指示があった方が助かります。

・資料1・2ともに、ラーニングコモンズについて分かりやすく述べられており、初任者や図書館以外の部署から異動してきた担当者にとっても助かる資料になるのではないかと思います。

「8. LC の拡張と進化」で述べられているとおり、LC と学習を結び付けるために学内の担当部署との連携は必須だと思います。本学の LC においては、学内他部署から提案された企画や講座を実施することが多いのですが、打合せの際に図書館側の考える LC の在り方と他部署が持っている LC とのイメージとにずれが生じることがあります。ずれを調整していく中で、思いがけない使い方の提案があったり、図書館職員だけでは得られなかった発想を得て、LC の運営に反映させていくことができます。また、学内に限らず学外者との連携も大事だと考えます。学内外を問わず、様々な人が考える LC 像を持ち寄り、すり合わせをすることが LC の進化につながっていくと思います。

・大学事務局など外部の理解および協力を繋げていけるものを目指して欲しい。

・図書館にラーニングコモンズを構築するにあたって、場として物理的に構築することは比較的容易だが、利用する学生らをどのように深い学びへと導いてゆくか。そこに図書館員の力量が試される。しかし、図書館員だけの力には限界があることは否めない。教員、学生の力を借り、より一層活発な学の間としての図書館を実現することを目指すことは新時代の図書館の志向すべき役割である。ただ、図書館の本来の目的「本を読む」「調べる」などの役割が薄くなり、「グループで話し合う」「場を借りて資料を作る」などの機能のほうが主なものになってしまう危険性がある。この兼ね合いが難しいと思う。

・ラーニングコモンズに関わる領域が多岐にわたり、基礎教育部門、情報部門、など様々な部署との連携が必要となるが、その業務の棲み分けをどのようにすべきか。

3 疑問

・「ラーニングコモンズの在り方」(案) が想定している読者の範囲が明示されていないため、本案を初見した職員からは、本案の位置づけや立ち位置に関する以下のような疑問点が寄せられています。個々の記述そのものは国立大学図書館の現状に基づいて適切な分析や考察がなされているかと思いますが、「大学（図書館ではなく）における LC とは」といったより俯瞰的な視点からの考察を目指すものなのか、あくまでも大学図書館側からの視点に基づき取りまとめたものなのかは大前提として明確にされるとよいと思います。

・「ラーニングコモンズ (LC) の在り方」というタイトルに違和感があります。「普遍的な」と言いながらも、1 節「前提」で言及がある通り、内容は「大学図書館」が主体として書かれている

るので、タイトルは「大学図書館における LC の在り方」としたほうが分かりやすいのではないのでしょうか。

・「はじめに」の3段落「もとより（中略）柔軟に運用を行うものである」と述べているにも関わらず、LC の在り方を提案するという部分に矛盾を感じます。「LC に関する理解が共有されているとは言い難い」のは同意できますが、その対応として LC の在り方を提案する論旨の展開に、やや飛躍（違和感）を感じます。

・7 節「LC を整備する建物（場所）及び組織の単位」について、2 段落「ワンストップで全サービスが提供されること」が最も使いやすくシンプルな LC であるというのはその通りだと思われませんが、その論から「最適な LC 設置場所を大学図書館とする」と展開する際に、論拠が省かれすぎだと感じます。3 段落で図書館に LC を設置するメリットが列挙されていますが、これを「図書館が LC の設置場所として最適である」とする主張は（図書館関係者以外に対しては）根拠として弱いと思います。

・普遍的な「LC の在り方」について書かれているはずであるのに、11 節で「大学図書館の今後のサービスについて」書かれているのも、『大学図書館に LC を設置する』ことが前提となっているように感じます。大学図書館間の共通理解のためとのことなので、図書館が主体に書かれているのも当然ですが、この文章を連携する他部署の職員が見て「それでは LC は図書館に設置しよう」となるには、文章が全体的に図書館側の視点に寄り過ぎているように感じます。

・「ラーニングコモンズとはこういうものである」と画一的な定義をしすぎないようにすべきと考える。 什器の種類や広さの基準などを決めてしまうと、その基準を満たすことにのみこだわるのが想定されてしまうからである。なるべくいろいろな解釈ができる在り方であってほしい。

・ラーニングコモンズとは、そもそも「場」を指しているのではないか？ 「ラーニングコモンズの在り方」とするよりも「ラーニングコモンズにおけるアクティブ・ラーニングの在り方」とした方がよいのではないかと考える。なぜなら、「ラーニングコモンズはあります」と手をあげていても、「人的支援やコンテンツまでそれなりに整っている」のかというとそうではなく、「場所のみ」を指している場合もあり、温度差があるように感じるからだ。「ラーニングコモンズ」は、各大学の学修環境に合わせて作られるのであるからして、各大学それぞれの個性があってし
かるべきである。「アクティブ・ラーニングの在り方」とすると、人的支援など共通の悩みや課題が浮かび上がってくるのではないだろうか。

・方向性を示すことは大切だと思うが、示されたものに向かって皆が、同じ方向を向いては画一的な図書館になってしまうのではないか。

4 質問

・「4.自律的な学習…」について、これらは学士課程に求められるすべてのスキルを網羅したものでしょうか。それとも LC がサポートすべきものはこの 4 点だということでしょうか。また「以下の 4 つのスキルは、いわゆる 21 世紀型のスキル iii に概ね対応する（脚注参照）。」は、このくんだり自体を脚注に移した方が読みやすいです

・「8 LC の拡張と進化」で学内の担当部署との連携についてふれられているが、先行事例があれば伺いたい

・LC の目標としてコミュニケーション能力やコミュニティ形成能力、ソーシャルスキルという対人関係のスキルの育成が掲げられているが、具体的にはどのような育成活動が想定されているか？

5 その他

・本学はラーニングコモンズを設置して日が浅く、提案書中の「LC の深化の方向性」に照らし合わせると、まだファーストステップの段階である。平成 27 年度もスペース拡充を進めていく計画が予定されているが、人的支援が未だ手つかずである点、また急速に多様化する教育環境や利用者の要望にどのように対応するかという点がこれからの課題であると考えます。

・本学は、現在、ラーニングコモンズを予算要求中であり、他大学を参考にしながら、独自色を出そうと考えています。

・意見は特にありませんが、「10. LC の方針」の箇所に、「(2) LC で可能な活動についての記述。より具体的な利用者向けの利用細則。」と記載されている件で、本学の事例を紹介します。本学では LC 細則は定めておらず、学生の自主性に任せています。細則はありませんが、LC だけではなく、図書館全体がどのような場であり、どのように使って欲しいかについて、「大人の図書館」をキーワードにし、学生の自覚を促すポスターを掲示しています。詳細は添付のポスターのファイルをご覧ください。